第十七講　戦争論・近代化論

「戦記」の類なら、ものが書かれはじめた当初から無数にあるし、それぞれの時代にはそれぞれの「戦術論」がある。だがAクラウゼヴィッツの『戦争論』一八三二―一八三四）以前に「戦争論」はない。そしてこのナポレオン戦争の敗軍の一士官をして、生涯をかけてこの書物を書かせたものこそ近代の戦争だったと言うことができる。戦争もまたナポレオン以後、あるいはフランス革命以後、それ自身の〈近代〉に入り、そのときから戦争は、歴史をいろどる勇壮なエピソードでも、贅沢で気まぐれなゲームでもなく、ある「絶対的なもの」、「全体的なもの」としてそれ自身の解明を求める何かとなったのである。

　クラウゼヴィッツは述べている。「ナポレオンこのかた、戦争は……これまでとはまったく異なる性質を帯びるにいたった、――と言うよりは、むしろ戦争の本性、即ち戦争の絶対的形態に著しく近づいた、と言うほうがいっそう適切である」。ここで言われる「戦争の本性」とは、敵を完全に打倒し無力化することである。戦争が「異なる手段をもってする政治の継続」であり、そのねらいが「相手に我が方の意志を強要する」ことにあるのだとすれば、戦争は基本的に政治的行動の選択肢のひとつであり、政治的目的を達成するための手段である。その意味では、武力を発動したとしても、敵を完全に打倒することはかならずしも必要ではなく、相手を降伏させるだけで足りる。そのあとは戦争は本来の政治的行動に場をゆずることになる。戦争はだから、知性の介入を排除するものではないが、もし一方が流血や損傷をいとわずとことん武力を行使する姿勢を示せば、相手が同じことをしないかぎり優位に立つことができる。だがそこで相手も同様の対応を示すとすれば、双方の武力行使はしだいに競り上がり「極度」にまで達することになる。そうなると戦争は、あくまでも政治的目的に合致しながらも、敵の壊滅という戦争それ自身の本性に限りなく近づくことになる。そのときにはもはや、戦争は政治性を脱却してその「純粋な」形態をあらわにして、それ自身「絶対的なもの」と化し、Bもはや破壊行為を抑制するものとしては、戦争それ自体に内在する障害以外にないという状況になる。

　それがいわゆる「C絶対的戦争」の原理だ。何かのためにする行為がそれ自体目的となり、いつのまにか本来のねらいを無化してしまうという、没入の心理学的ゲームを思わせるこの原理は、おそらく動物の闘争本能と呼ばれるものや、人間の尊厳の意

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

識とも無縁ではなく、どんな小さな諍（いさかい）のうちにも可能性の極として含まれている。だが、「戦争の動因が大規模になり、また強力になるにつれ、またこの動因が国民の全般的存在に関係するにつれ、更にまた戦争に先きだつ彼我両国間の緊張が高まるにつれて、戦争はますますその抽象的、絶対的形態に接近し、……ますます純粋なものになり、ますますその政治性を失却するかのように思われる」（強調引用者）。クラウゼヴィッツが対ナポレオン戦争の経験をとおして、深い戦慄とともに見いだしたのは、戦争が〈国民〉の戦争となることによって可能になった、この原理の無制約的な発現だった。そしてまさしくそのことが〈戦争の近代〉を画すものであり、この「絶対的戦争」の露呈が、戦記でも兵法でも政策論でもない『戦争論』を彼に書かせることになったのである。

　クラウゼヴィッツが強調するのは、ナポレオンの率いた軍隊が〈国民〉の軍隊だったということだ。ナポレオンの軍隊は数においても士気においても圧倒的な力を発揮したが、それは彼らが、国王のために戦争に駆り出された僕従でもなければ、他人の戦争に金で雇われた傭兵でもなく、自分自身の戦争にみずから参加する〈国民〉だったからである。〈国民〉として闘うこの強力な軍隊の出現は、やがて同盟国側にも〈国民〉意識の醸成を促すことになり、これ以後戦争は基本的に〈国民〉と〈国民〉との激突の様相を呈することになる。少くとも、政治は戦争をそのようなものとして演出するようになる。

　この「諸国民戦争」は、王家の利害のために発動される戦争と違って、広範な〈国民〉の積極的参加に支えられており、その全般的存在を関わり合いにして、対立は〈国民〉同士の対立として抽象的なかたちで激化する。「抽象的」というのは、国王や王家の利害というのが具体的で限定されているのに対し、〈国民〉というものがもともと概念的存在でしかなく、それゆえにこそこの概念的存在は具体的条件を超えてどこまでも肥大しうるからだ。そればかりでなく、これまでなら王家の財政事情に制約されていた戦争手段の調達も、人的にも物的にも国家財政の枠まで広げられることになり、原理的にはその完全な破綻にいたるまで戦争は遂行しうることになる。要するにD〈国民国家〉の成立が、戦争の絶対化の条件を整えたのである。

　フランス革命は、絶対王権を廃して人民主権を実現した。だが王権の廃止によって人々は、たんに自由で平等な個人として解放されたわけではない。王権から解放された個人は、ただちに〈国民〉たることを運命づけられていた。革命はすぐさま諸外国の干渉を引き起こすことになったが、人々は獲得した自由を守るためにまず自由の体制を、つまり今や自分たちのものとなったフランス国家を守らなければならなかった。それまで国土を領有する王家とそこに住む領民との支配と帰属の空間であった国家

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

は、このときから国家が民衆の総体と合致する〈国＝民〉の空間になったのである。そしてこの戦争は〈国民〉が自分のためにみずから遂行する〈国＝民〉の戦争となる。戦争の主体はもはや「私が国家だ」と主張する絶対的主権者ではなく、「われわれが国家だ」と自負する無数の小さな主権者であり、兵士はいまやたんに利用される手段ではなく、みずから闘う理由を自覚している。したがってこの戦争は、もはや国王のものでも特定の戦士階級のものでもなく、「われわれ」と言いうるすべての者の戦争なのだ。

（西谷修『戦争論』）

〈注〉クラウゼヴィッツ（一七八〇～一八三一）…プロイセンの軍人、軍事理論家。『戦争論』の著者として有名。

問１　傍線部Ａからうかがえる著者の戦争観に**合わない**ものを次から一つ選べ。

①　本来的な戦争といえるのは近代の戦争である。
②　戦術は戦争の二次的な側面である。
③　大量破壊兵器を用いた戦争が本来の戦争である。
④　戦争はある「絶対的なもの」として現れてきたとき本来の戦争となる。

問２　傍線部Ｂにある「もはや破壊行為を抑制するものとしては、戦争それ自体に内在する障害以外にないという状況になる」というのはどういう状況を指しているのか。本文全体の趣旨を考慮した上で、次から最も適切なものを一つ選べ。

①　戦争は敵を徹底的に破壊しようとするものだが、戦争にはもともとそれを妨げる障害があり、それが最終的に戦争を抑制する状況。
②　戦争には動物の闘争本能に似た何かがあり、一方が武力を行使する姿勢を示せば、他方もそれに応ぜざるをえない状況。
③　戦争は相手を降伏させるという目的をもって始めるが、いつのまにかその行為が自動的に動き出し、その破壊は究極まで至らないと止めることができなくなる状況。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　戦争に一端突入してしまうと歯止めがきかなくなり、戦争の原因となった問題が解決されたときにのみ、それを終結させることができるという状況。

問３　傍線部C「絶対的」を別の用語で置き代えたとき不適切なものを次から一つ選べ。

①　無制約的　②　決定的　③　純粋な　④　全面的

問４　傍線部Dに「〈国民国家〉の成立が、戦争の絶対化の条件を整えたのである」とあるが、これはなぜか。次から最も適切なものを一つ選べ。

①　人々が〈国民〉となることによって、国家は〈国民〉を強制的に全面的な戦争に徴用することが可能になるため。

②　〈国民国家〉になると、王家の財政事情などによって制約されなくなり、国家の為政者は自分で戦争手段の調達も自由にできるようになるため。

③　人々は、王家に帰属する領民から〈国民〉になると、国王によって戦争に無理やり駆り出されるものではなくなって、〈国民〉として自由意志で参加が可能になるため。

④　〈国民〉という概念は曖昧でどこまでも広がるために、小さな対立も〈国民〉の対立として激化しやすく、国全体を巻き込んだ果てしない戦争に突き進む可能性が大きくなるため。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十七講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　西谷　修＝にしたに　おさむ（一九五〇〜）愛知県生まれ、東京大学法学部卒。その後、東京都立大学大学院、パリ第八大学で学ぶ。立教大学特任教授。哲学・フランス現代思想が主な研究分野。入試小論文や入試現代文で頻出の研究者です

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

語句

近代＝きんだい→中世や伝統的社会に対して、科学、理性、民主主義や個人の自由・権利を重視する時代
勇壮＝ゆうそう→勢い盛んで勇ましい。力強く堂々たる様子
エピソード→挿話・物語
本性＝ほんせい・ほんしょう→本来、本質的にもっている性質。人の隠れた本音などを指すときには「ほんしょう」と読むことが一般的で、学問的に探究すべき対象のときには「ほんせい」と発音するのが一般的
いとわず＝厭わず→いやに思わず
抑制＝よくせい→勢いをおさえて、とどめること。感情などの高まりや噴出をおさえつけること
制約＝せいやく→条件づけて自由を縛ること
諍(い)＝いさか(い)→争い・言い争い・ケンカ・闘争
動因＝どういん→原因・動機となるもの・インセンティブ
戦慄＝せんりつ→恐ろしさで体がふるえること。「戦慄く」で「わななく」、「戦く」「慄く」はともに「おののく」と読み、これらすべて、ふるえること
士気＝しき→兵士の戦闘意欲、やる気・熱意
発現＝はつげん→内から外へとはっきり表れること・発露
醸成＝じょうせい→かもし出すこと・次第に作り出されること
概念＝がいねん→ことば・とくに抽象的なことば・概括的でおおまかな意味内容・コンセプト
肥大＝ひだい→ふくれあがること・通常や正常な状態より大きくなること
破綻＝はたん→うまくいかず、修復できない状態に陥ること

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十七講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）勇ソウな行進曲を奏でる　①荘　②葬　③創　④総　⑤壮

（イ）敵を容赦なく打トウする　①頭　②倒　③討　④踏　⑤闘

（ウ）政治的な目的を達セイする　①制　②征　③成　④政　⑤誓

（エ）降フクせずに徹底抗戦する　①副　②伏　③腹　④覆　⑤福

（オ）相手よりユウ位な立場になる　①優　②有　③勇　④右　⑤雄

（カ）悪習からの脱キャクを試みる　①脚　②却　③客　④隔　⑤格

（キ）海洋兵力のヒ我の格差を知る　①非　②被　③彼　④比　⑤飛

（ク）内なる力の発ゲンを見る　①原　②元　③言　④現　⑤眩

（ケ）対話的な雰囲気をジョウ成する　①剰　②醸　③穣　④譲　⑤場

（コ）赤字で国家の財政が破タンする　①嘆　②淡　③綻　④短　⑤端

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十七講　戦争論・近代化論

《本文の対比構造》

主役＝近代の戦争
ナポレオン戦争以後

クラウゼヴィッツの『戦争論』
「絶対的なもの」「全体的なもの」・
「戦争の本性」「純粋」「政治性を脱却」
戦争それ自体が目的化する
「無制約」〈国民〉の戦争

主な対比

小さな対比

比較相手＝近代以前の戦争

「戦記」「戦術論」
王家の利害のための戦争
国王のために戦争に駆り出された僕従
金で雇われた傭兵

動物の闘争本能

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《傍線部説明・間違い探し・選択肢》

筆者がこの文章で描いているのは、戦争全般ではなく、「近代の戦争」です。また筆者が取り上げた、クラウゼヴィッツの『戦争論』も、それ以前の戦争とは異なる「近代の戦争」に焦点をあてています。「近代の戦争」になって、はじめて戦争そのものの「本性」が現れます。当初あったはずの「政治的目的」さえときに脱却して、敵を完全にのめし、打倒し、無力化するまで突き進んでしまいます。「何かのため」だったはずの戦争が「それ自体目的」となります。ゆえに「無制約（ノンストップ）」「純粋」「全体的」なものになります。したがって、近代の戦争を「本来的な戦争」「本来の戦争」とした①や④は本文の記述に合っています。②の「戦術」は「二次的」という評価も正しいと言えます。「二次的」とは、大事ではない、本質的ではないという意味です。そうです、「それぞれの時代にはそれぞれの『戦術論』がある」と第一段落にあるように、「戦術（どんな武器を使うかとか、どんな陣地を築くかなど）」は、近代以前の昔からある。古代ギリシャの重装歩兵の密集隊形（ファランクス）とか、日本の戦国時代の鉄砲隊の配置もそうした例でしょう。しかし、「近代の戦争」では、戦争それ自体、「それ自身の解明」を必要とするものになります。したがって、戦争それ自体の全体性や絶対性や純粋性を語ることが〝第一次的〟に重要で、戦術は「二次的」になるのです。③の「大量破壊兵器」が×で、これが答えになります。「大量破壊兵器」は、核兵器や生物化学兵器などです。〝現代か！〟とツッコミを入れてください。もちろん、本文中にも出てきません。記述なしです。

問２《傍線部説明・選択肢》

政治的目的をおいてけぼりにして「とことん」「極度」までいってしまう戦争のありかたを「戦争それ自体に内在する障害以外にない」と表現しています。物資や人材が底をついて、戦争自体を遂行できなくなるまでやってしまう、つまりストッパーや安全装置はないということです。①の「戦争にはもともとそれを妨げる障害があり、それが最終的に戦争を抑制する」では正反対になってしまいますね。戦争には、行き過ぎない安全ストッパーがついているという話になってしまいます。そりゃ安心だね（皮肉です！）。というわけで、記述に反する誤りと言えます。④の「戦争の原因となった問題が解決されたときにのみ、それを終結させることができる」では、冷静にも政治的目的にしたがっています。これまた正反対です。対比混乱の誤りですし、「のみ」

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

は、不当な限定です。②は「動物の闘争本能に似た何か」が×です。本文には、たしかに「動物の闘争本能と呼ばれるもの」とも「無縁ではなく」とあります。しかし、それは「どんな小さな諍のうちにも～含まれている」とあるように、「近代の戦争」以前のものにもあてはまってしまいます。筆者自身、「だが」という逆接の接続語で「動物の闘争本能」の話を乗り越えています。そうして「近代の戦争」の特別の特徴として、「〈国民〉の戦争」として、熱狂的に全面化するという話を展開しています。したがって、「近代の戦争」の説明のはずが、それ以外の戦争にもまたがるものを答えたこの選択肢は、対比混乱の誤りなのです。こういうわけで、「破壊は究極まで至らないと止めることができなくなる」とした③が正解です。

問３《傍線部説明・間違い探し・選択肢》

問１とよく似た問題です。間違い探しの問題であるというだけでなく、内容的にも重なります。「絶対的」は、「近代の戦争」の特徴ですから、言い換え・置き代えとして、①「無制約的」③「純粋な」④「全面的」はすべてＯＫです。②の「決定的」が×でこれを解答として選びます。野球やサッカーでも〝決定的ホームラン〟〝決定的なゴール〟〝決定力がある〟などの表現は、〝勝敗を決する〟、だらだら延長ではなく、これでスカッとおしまいにするということです。ところが、「近代の戦争」はそうではありません。「とことん」までやります。相手の「降伏」や政治的目的さえ忘却しかねないものです。したがって、「決定的」では、はっきり対比混乱の誤りと言えます。

問４《傍線部説明・選択肢》

「近代の戦争」は「〈国民〉戦争」として、「絶対化」・全面化します。かつてのように王様から「駆り出される」ことはなくなりますが、かといって戦争に参加してもしなくても〝自由気まま〟〝勝手気まま〟にできるというわけではありません。「〈国民〉たることを運命づけられて」います。フランス革命の場合なら、革命で「獲得した自由を守るためにまず自由の体制を、つまり今や自分たちのものとなったフランス国家を守らなければならなかった」のです。自分はこの国の国民だと考える人は、戦争にだって自ら参加しなければならなかったと言えます。そうでなければ、自分は〈国民〉ではない、ということになるだろうし、まわりからも〝非〈国民〉め〟と言われてしまうかもしれません。本文で、国民にカッコをつけて〈国民〉としているのも、国

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

民というものが「抽象的」で「概念的（抽象的なことばということ）」と表現しているのも同じ理由です。つまり、国民であることは、当たり前の自明なものでも、固定確定したものでもなく、自ら〈国民〉と考え、戦争にだって行く覚悟がある者ということなのです。①は「強制的」「徴用」が×です。これでは前近代の王様によって「駆り出される」のと同じ水準になってしまいます。フランス革命という民主化などなかったかのごとき選択肢です。対比混乱の誤りです。②は「為政者（政治家）」の話になっていて国民がでてきません。また、財政の「調達」について「自由にできるようになる」とプラス評価のような書き方をしていますが、間違いです。本文は、国家の財政まるごとの「完全な破綻」にいたってしまう危険・リスクを語っているのでした。記述に反する誤りです。③は戦争について「自由意志で参加が可能」としていますが、先にも書いた通り、はなはだしい間違いです。国民として、自分をある国の国民と考えるならば、参加しなければならなかったはずです。対比混乱の誤りと言えます。また「自由」を勝手気ままさとしてとらえていますが、文脈喪失の誤りです。本文ではフランス革命で「獲得した自由を守るために」「自分たちのものとなったフランス国家を守らなければならなかった」とありますよ。したがって、④が正解です。

模範解答

問１＝③　問２＝③　問３＝②　問４＝④

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第十七講

（ア）⑤　（イ）②　（ウ）③　（エ）②　（オ）①
（カ）②　（キ）③　（ク）④　（ケ）②　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）勇壮　（イ）打倒　（ウ）達成　（エ）降伏　（オ）優位
（カ）脱却　（キ）彼我　（ク）発現　（ケ）醸成　（コ）破綻

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。